「国立アイヌ博物館構想」

白老町に建設決定

東京白老会副会長
堀川哲夫

これまで大都市に建設されてきた国立博物館が北海道の小さな町白老に建設されることになり、全国で8番目の国立博物館となる。

政府は2012年7月、「民族共生の象徴となる空間（象徴空間）」の基本構想を決め、アイヌ文化の復興、発展の中心になる拠点を白老町に建設することを決定、14年度に国の博物館基本構想の具体的計画を策定する。

これまでにポロト湖畔に博物館、中央広場、体験・交流の3ゾーンを設ける土地利用計画が決まっている。ポロト湖周辺には40年前から財団法人アイヌ民族博物館があり、チセ（伝統家屋）でアイヌ古式舞踊、ムックリ（口琴）の製作、木彫や刺しゅうの体験学習等アイヌ文化の伝承活動が続けられ、その実績が評価された。白老町でも2007年にアイヌ施策基本方針を策定、北海道大学と連携して共同研究や交流を通してアイヌ民族との共生を推進してきた。

国立博物館の完成の暁にはアイヌ文化への理解と共感が高まり、更には先住民族の世界大会の開催等により、広く、世界注視の的となり世界の人々との交流により、町の振興発展に大きく寄与するものと期待される。

美幌町の起源

東京美幌会副会長
我妻誠

「ビホロ」という文字が最初に記録されたのは文化6年（1809）。函館奉行支配役、荒井保恵の手になる『東行漫筆』の中に記録されている。

この頃、釧路から釧路峠を越え、美幌を経て斜里に至る道中に「ビホロ」という地名が出てくる。

安政元年（1858）、幕府は松浦武四郎に北海道の山川地理取り調べを命ずるが、彼の書いた『久摺日誌』の中に「ビホロ」というコタンがあることが明記されている。

この地方は、網走川沿いであったところから「アバシリ」とも言われたが、その支流の美幌川沿いに有力なコタンがあり、ビホロコタンの名を高めていたので、数百年前から「ビホロ」と呼ばれていたものと思われる。

明治になってから、この地方は津別を含め約11万ヘクタールの地域にビホロ、ケネタンペ（杵端辺）、フレメム（古梅）カックミ（活汲）、タッコフ（達媚）、ポンキキンの6ケ村が一つの行政区域となり、明治20年7月1日に戸長役場が設置された。

初代戸長に任命された野崎政長さんは明治20年10月12日に古老を集めて開庁式を行った。この時の住民はアイヌの人たち15戸、93人と野崎一家3人であった。

この時を以て、美幌町の開基としているのである。

この15戸は美幌川沿いの各村に点々と2～3戸がバラバラに暮らしており、畑を作ると言っても5坪や10坪のわずかばかりの土地では、鳥やウサギの餌になるだけで、生活は困窮を極めた。

そこで、野崎戸長は一同を説得し、明治24年にアシリベックシ（元町）の役場の側に宅地と畑を世話して、全員を集めて住まわせたのである。

美幌原野が測量され、区画割りが出来上がったのが明治30年で、それまでは全体が無番地であったため、一般の人は誰も入植できなかったが、区画され、地番ができると、明治31年に初めて入植者が現れた。

明治37年に宅地区割りが出来上がり、市街に家が建つようになった。

この区画割りが出来上がった時点で戸尾町役場や郵便局などの官公庁予定地が示されるようになり、徐々に市街地が形成されていったのである。

大正元年（1923）には、池田～網走間に鉄道が開通し、入植者が急増、大正12年（1923）には、一級町制が施行され、美幌町となった。（その当時の人口は1万1158人。）

銀座で創業30年余、
都心の不動産のことならお任せを！

不動産の売買・仲介・管理・ご相談承ります

株式会社 八千代商会

代表取締役 堀川哲夫（東京白老会・副会長）

公益法人
東京都宅地建物取引業協会会員
都知事免許（9）42450

〒104-0061
東京都中央区銀座3丁目11番7号
電話 03-3545-1466（代）
FAX 03-3546-3860